

木工技術官司に関する一考察
- 木工寮と造宮省を中心にして -

初等教育教員養成課程 社会選修 史学専攻

山下航輝（古代史研究室）

私の卒業論文の題目は『木工技術官司に関する一考察 - 木工寮と造宮省を中心にして - 』である。以下、要旨を報告する。

はじめに

8世紀は造宮事業が多く行われた時代であり、木工寮が令内官司として存在した。同時に令外官である造宮省も存在した。この関係性については長山泰孝氏や十川陽一氏の研究がある。しかし、造宮省廃止以前以後の木工寮で変化はあるがその原因については明らかになっていないため長官人事を中心に考察する。また、木工寮の性格について成立背景等から内廷官司と捉えられているが職掌を考え性格について再検討を行う。

第一章 8世紀の木工技術官司

[第一節 令内木工技術官司]

養老職員令木工寮条【史料1】に木工寮が土木事業を掌る官司であることは明記されている。しかし、実態が明らかとなる史料は極端に少ない。さらに、木工頭に任命された人物の官歴に注目すると会計色の強い官司を歴任している。木工寮は造宮事業に対して会計官司という形で携わり予算作成を職務としていた【史料2・3】。そのため、現業官司として実際に現場で活動する役割は他司へ委ねられることになった。

[第二節 現業官司としての造宮省]

天平17年4月と10月に木工寮解と造宮省移が確認でき造宮対象も同じであることから現業官司としての役割を担ったのは造宮省である。造宮省は甲賀宮や恭仁京造宮を行い遷都が行われるような主都となる宮殿・離宮を造宮対象にもっていた。さらに、造宮省の前身である造宮官や造宮職もそれぞれ藤原京造宮、平城京造宮に大きく携わった官司であり職掌は古くから同じであった。

[第三節 木工寮の成立と並存]

木工寮の成立と成立時の性格から木工寮と造宮省の並存について考察した。木工寮の起源となるのは唐の将作監である。将作監と木工寮は計算能力等は共通するが実務能力に差があった【史料5】。これは、木工寮の成立に原因があり木工寮は成立時内廷的性格が強いとされ、天皇家産制を継承していた。反対に将作監は外廷官司であったためこの差異が木工寮の会計能力、造宮省の実務能力という並存へつながったと考える。

第二章 長官人事からみる木工技術官司

[第一節 造宮省の実態と長官人事]

造宮省は亀田隆之氏により 3 つの時期に分類された。その中で 3 期造宮省は造営事業を行っておらず、反対に 1 期・2 期造宮省は活発に造営事業に関与した。ただ、3 期造宮省の時期は造営事業自体は活発に行われ他司に木工技術官司が多数存在していた時期であり、造宮省の機能が停止し冗官化していた。さらに、1 期・2 期造宮省の長官（卿）になった人物は軍事と関係していたが、3 期になるとその特徴は見出せなくなった。機能停止した 3 期造宮省には軍事が必要なくなったことが理由と考えられるが、そうすると造営事業が盛んな 1 期・2 期と関係のある軍事は造宮省というより造営事業自体と軍事に関係があると考えられる。

[第二節 後期木工寮と武官・技術官]

造宮省は延暦元年に廃止されるが廃止以前以後の木工寮をそれぞれ前期木工寮、後期木工寮と呼ぶ。後期木工寮の長官人事に関しては【表 1】にまとめる。後期木工寮では前期木工寮の特徴であった会計官司としての姿がなくなり、代わりに武官官歴を持つ者と技術官司の増加がみられる。この点について直木孝次郎氏は木工寮はいざという時の軍事力を保持し潜在的に軍事力を保持した官司であると指摘されている。木工寮は前期の時点で軍事力を潜在的ではあるが有しており、現業官司であった造宮省が並存時に有していただけであった。造宮省が廃止されたことで後期木工寮が現業官司になったことで軍事との関係性は木工寮へと集約されたと考えられる。また、会計官司から現業官司となったために技術に精通した技術官が必要になったのであろう。

[第三節 造長岡宮使と後期木工寮]

造宮省廃止後の 3 年後に長岡京造営のために新設された官司が造長岡宮使である。この官司には造宮省のような現業官司としての性質を任命された人物から窺うことができる。任命された 10 人中 6 人が武官を官歴に持ち、武官を複数務めた人物や造長岡宮使任命時本官に武官を持ちながら兼官をした人物が 2 人いる。木工技術官司を官歴に持つ者も 2 人と現業官司としての姿を確認することができる。【表 2】一時は後期木工寮が現業官司となったが前期木工寮 - 造宮省と同様に後期木工寮 - 造長岡宮使と再び並存状態になったのだらう。

第三章 木工寮の性格の再検討

[第一節 飛驒工と木工寮]

木工寮の性格について再検討する。内廷とは天皇の家政に奉仕することであり、宮内省や中務省等が該当する。木工寮には飛驒工が多数存在し遠藤元男氏は約 104 人が徴用されたと推測した。飛驒工は飛驒国から造営に参加した技術者で【史料 7】『日本後紀』に逃亡が多発していることから飛驒工の苛烈さが窺え、同時に政府が搜索をしたり言上を求めていることから政府にとって飛驒工の技術は必要なものであったと考えられる。ただ、その

ような技術者が前期木工寮に多数配属されているのは不自然である。会計官司である前期木工寮と現業官司である造宮省で同数の飛驒工は不必要ではないか【表3】。

[第二節 技術補完体制と性格]

技術補完体制は榎木謙周氏が指摘された技術者を官司同士で移動させることであり、特に長上工の移動に注目される。造東大寺司の長上工が集団で他司へ移動しており、集団を移動させることで技術の移動も行っていった。さらに、長上工の移動には技術教習の機能も含まれていた【史料8】。そして、木工寮にも約20名程度の長上工が存在し造東大寺司と同様な補完が行われていたと考えられる。そうすると、会計官司であった木工寮に造宮省と同数の技術者が所属した理由が技術補完にあり、飛驒工の多すぎる所属も同様の理由と考えられる。また、木工寮が造寺司から轆轤工の派遣を要請されており、工人の派遣もあった。木工寮は会計官司に見合わない技術者を保有していた。ここから、木工寮は木工技術補完体制の中心的存在であったと考えられる。したがって補完体制の中心であることから成立時のような内廷的性格は窺うことができない。

[第三節 職掌からみる木工寮の性格]

木工寮の職掌はもう1つ供御物の作成があった。ただ、その職務は神亀5年に設立した内匠寮が一部引継ぎ、以後それを担うようになった。内匠寮は木工寮と官人構成が特殊な点や駆使丁を配属している点で共通している【史料9】。職掌を考察すると内匠寮は内廷的性格の強い官司であり、ここから木工寮も同様に内廷的性格を見出せる。木工寮は造営事業は造宮省と供御物の作成は内匠寮と関わりながら行い、造宮省や内匠寮は木工寮の負担軽減のために設けられた補助的な官司ではないか。造宮省や内匠寮は令外官でありながら1世紀近く存続し、令外官の中では特別長い。また、造宮省は外廷官司、内匠寮は内廷官司であった。木工寮が両司と関与したこと、技術補完体制の中心にいたことから職掌において木工寮は内廷・外廷的性格を有していたのである。9世紀になると木工寮が造営の中心となっていくが、『延喜式』木工寮式からは内廷的性格が明らかである。木工寮は内廷・外廷に成立から職掌として関わり続けたのである。

おわりに

後期木工寮になると武官官歴を持つ長官が急増した。これは木工寮が本来潜在的に持っていた軍事力のため造宮省廃止により木工寮へ集約しただけである。前期・後期木工寮で長官人事に伴う変化はあるが職掌に大きな変化はなく家政への奉仕も行われた。同時に木工技術補完体制の中心として技術者派遣も行った。木工寮は8世紀を通して職掌において内廷・外廷的性格を持った官司であったのである。従来考えられてきた成立背景・宮内省被管であることから内廷官司であるという1面性ではなく、2面性を持ち続けた官司が木工寮なのである。